



TITLE:

# オフィス・オートメーションの下での労働の特徴について

AUTHOR(S):

北川, 與司雄

---

CITATION:

北川, 與司雄. オフィス・オートメーションの下での労働の特徴について. 経済論叢 1989, 143(1): 36-51

ISSUE DATE:

1989-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/134284>

RIGHT:

# 經濟論叢

第143卷 第1号

---

共同管理会計の組織的正統性……………	高 寺 貞 男	1
近代世界における農業経営，土地所有と 土地改革 (1)……………	中 村 哲	19
オフィス・オートメーションの下での 労働の特徴について……………	北 川 與司雄	36
産業革命期イギリスにおける スピーナムランド制度の展開 (1)……………	廣 重 準四郎	52
高橋財政下の地方財政改革構想……………	山 田 浩 貴	72
書 評		
森 建資「雇用関係の生成——イギリス労働 政策史序説——」(木鐸社，1988年)……………	八 木 紀一郎	92

---

昭和64年1月

京都大學經濟學會

## オフィス・オートメーションの下での 労働の特徴について

北 川 與 司 雄

### I は じ め に

近年、オフィス・オートメーション（以下OAと略称）に関する調査、報告が目だってふえてきている。ところがこれらの成果にもかかわらず、若干の概念の混乱がみられるので、最初にその点を整理することから始めることとする。まずOAについて一番問題視されているVDT装置つきの電子計算機又はVDTのみに従事している労働（以下VDT労働と略称）者に関して、VDTオペレーター（以下オペレーターと略称）、並びにキー・パンチャーは、単純労働で不熟練労働と規定されていることが多い。しかし、それらの養成には社内研修が必要であり、また、OAの機器はそれ自身発展していく特性をもっており、絶えずそれに伴って社内教育、技術専門学校へ通うことが必要になってくるのであるから、これらの労働は、普通の人間の心身の発達だけで可能となるのではない以上、複雑労働の部類に入ると思われる。カール・マルクス『資本論』の中で、工場労働者については単純労働・不熟練労働の規定をしているのであり、直接、事務労働に適用するには、慎重を要する。ところで、最近、第三次産業の第二次産業化という言葉が使われてきているが、このようなとらえ方では、経済学上、使いものにならないとして、都留重人氏が第三次産業を五類に分類している。

すなわち(I)物的生産との関連で生産的労働の産物とみなされるもの（建設、電気、ガス、水道、運輸、通信、保管、包装、調達）(II)生産的労働にたずさわる労働者の生産性を高めるためのもの（科学、技術、教育、医療、芸術）

(Ⅲ)社会経済全体の進行を安全かつ円滑ならしめるもの(公務、防衛)(Ⅳ)消費者個人が個々に買うサービス、(Ⅴ)資本主義の無政府的生産との関連で発達したサービス(商業、広告業、不動産業、保険業、証券業、弁護士活動、各種コンサルタント)<sup>1)</sup>という具合である。このうち、教育、芸術を除いては、独自の事務部門をもっている。第三次産業の第二次産業化というよりも、この事務部門がOA化されているという見解をとる方が適切であろう。また大木啓次氏によれば、いろいろな種類の熟練労働の中には、単純労働もあれば、複雑労働もあるということなのであると述べられている<sup>2)</sup>。

OAの主力機器であるVDT装置のついたマイクロコンピュータ(以下VDTと略称)のオペレーター並びにキー・パンチャーは複雑労働であり、かつ不熟練労働であるということになる。ここに、この規定をしたのは、Ⅵ章で、労働の内容が問題になる際に注意を払う必要があるので、先取的に述べておく。

さて、以上のような関連のなかで、「労働の強化」という点が叫ばれているので、この概念を整理してみることにする。

## II 労働の強度について

この問題に対しても、『資本論』の叙述からの示唆を慎重に適用してみることにする。

マルクスは『資本論』第三卷第十六章の商品取引資本のところで、商業に従事している労働者は、不生産的としているが、労働の強化一般は『資本論』第一巻で与えられているので、ここに商業部門の労働者の労働の強化を含んでいると考えてさしつかえない。そこでは「生産部門が異なれば、総じて労働の強度にも相違が生ずる。かかる相違は、すでにアダム・スミスが明らかにしている如く、部分的には、各種の労働に独自の副次的な諸事情により相殺される。」<sup>3)</sup>ここでは労働の強度の部門平均度は社会的な平均度と同等とみなすこと

1) 渡辺雅男著、『サービス労働論——現代資本主義の一視角——』三嶺書房、1985年4月参照。

2) 大木啓次「不熟練労働」『立教経済学研究』26巻2号、1972年。

3) Marx, Das Kapital, I, Werke Bd. 23, S. 430.

ができるとしているのである<sup>4)</sup>。まずもってマルクスは労働の強度の「社会的な平均度」を確定できるとしている。ところが、事務労働分野の労働がオートメーション化される前に、この部門が工場に比べて不生産的と攻撃されたのは、工場で作られた生産物が出来るだけ早く販売することをめざしているのに、その製品の取引に必要な書類の作成が遅れることを突いたものであろう。そこでOAが導入されるはめになり、労働の強化がもたらされることになり、労働の強化は社会的な平均に合致したものになる。また労働の強化の限界として『資本論』の以下のような著述がよく引用される。

「一時的な発作ではなく毎日くり返される規則正しい斉一性が大切なような労働においては、明らかに一つの結節点、即ち労働日の延長と労働の強度とが排除し合い、労働日を延長するには、労働の強度を低下させざるをえず、逆に強度を高めるには、労働日を短縮せざるをえないという結節点が生ずるに違いない。」

ここに、労働の強度が、この結節点にまで高められることにより、いろいろな部門の作業に従事している労働の平均度に比して、何時間でどれだけの出来高でもって、労働の強度の社会的平均化が測定できる。

ところで、問題は、その人間的生理現象の限界を越えて、労働の強化が行われると、「労働力そのものの破壊」を意味することである。我が国では、4時間を越えてVDT労働が行われることがある。産業革命が起こった時代においても、資本家は、労働力そのものの破壊を引き起こしたので、労働者階級の闘争と、総資本からみた利潤の永続的獲得のために、工場法や社会的制度を生み出した。我が国では現代のVDT労働に関して、立法的規制措置が全くないので、職業病等が著しく増大してきている。西欧では、すでに立法的保護措置がとられているのに比して、我が国も立法措置を講じなければならない。

4) 佐武弘章「労働の強度について」『社会問題研究』大阪事業短大、1・2号、1973年参照。

### III 労働の疎外について

現代では「疎外」という言葉が乱用されている。ここでOAのもとで働く労働者の疎外を検討するために、『経哲手稿』<sup>5)</sup>の叙述をVDT労働の疎外とかかわらせてみよう。

「①人間は普遍的自己措定の主体として、類の社会的存在なのであるが、とりわけそうした存在性格の規定的基礎を『労働』のうちにもつ。すなわち、人間の労働が意識的かつ共同的であって、自由な生命確証行為であり、かつ対象及び自己産出的であるからこそ人間の全存在性格は類の本質となるのである。」<sup>6)</sup>ところが資本主義的生産様式の下では、「第一に労働は労働者に外的である。すなわち、彼の本質に属していないということ。つまり(一)労働者が労働の生産物にたいして疎遠な対象、彼を支配する強力な対象にたいしてのようにならざるという関係。」なのである。この点VDT労働では、ミス・パンチしたり、席を立ったりしている回数まで電算機の端末の記録により管理者にわかるようになっており、このような機械が労働者に対して、彼を支配しているという気持ちが一層強くなる。

また「(二)労働が生産の行為にたいして労働の内部でもつ関係。この関係は、労働者が彼自身の活動に対して、ある疎遠な彼に所属しない活動のようにならざるという関係である。」<sup>7)</sup>コンピュータが人間の労働に必要な労働に関する知識、判断の多くの要素を吸収し、労働者の労働の内容からの解放を押しすすめていることは、まさにこのことをさしている。「疎外された労働は、人間から、(一)自然を疎外し、(二)人間自身を、人間の自己の活動的機能を、人間の生活活動を疎外することによって、それは人間から類を疎外する」<sup>8)</sup> ことによって

5) 『経哲手稿』藤野渉訳、国民文庫版、103～106ページ。

6) 越智保則「マルクス『労働』概念についての一考察」『経済論究』九州大学大学院、26号、1971年、86～87ページ参照。

7) 『経哲手稿』藤野渉訳、国民文庫版、104ページ参照。

8) 同書、105ページ。

疎外が現れるのである。このような疎外の構造は、事務部門にも存在しているものであり、たとえ、複数のキーパンチャーを並べて配置しておいて、休息の時間に会話をさせてみても会話の中身は疎遠な内容としかならないであろう。

#### IV OA における分業と協業

本章では、機械制大工業時代のオフィスの分業と協業の関係とOAのもとでの分業を比較してみることにする。

「機械制大工業において機械が部分機能への労働者の生涯的合体の技術的基礎を除去する可能性を与えながら、旧来の分業体系をいとうべき形で再生産するというこの逆転が生ずるのも、機械が資本として、労働者にとって外的な力として君臨するからに他ならない」<sup>9)</sup>

では現代についてはどうか。事務分野の構成は、技師（システム・エンジニアがこの地位についていることが多い。）、保守係、管理職、オペレーター、キー・パンチャーに分れる。オペレーターとキー・パンチャーについて前述したような労働の質を、技師と保守係りにについてみると、保守係と技師は、複雑労働で熟練労働とみなされる。一見するとキーパンチャーとオペレーターが一方の極におかれ、他方の極に技師と保守係がおかれ、労働が二極分解していくように見える。しかし、オペレーター並びにキーパンチャーは複雑労働であるのは、多種類のVDT労働が行なえるように多能工化されるからである。したがって機械制大工業時代の労働者のように、単純労働でしかも不熟練労働であったにもかかわらず、現代のVDT労働については、上記のような特性がみられるのである。VDT労働者が機械のスピードを速めるのは、他資本との激烈な競争のためである。しかし、人間の手や指の動く速さの限界はきまっており、そこで亦、新しいOAの構築をシステム・エンジニアが行うことになる。機械に付属している程度が、さらにきつくなっていることから、神経系統の職業病が増大している<sup>10)</sup>。

9) 古賀英三郎「分業問題」『一橋論叢』56巻6号、1966年、691ページ。

しかしながら、ここで注意しておくべき点がある。かつて中村静治氏が以下のように述べていたことである。

「機械の操作が人間の頭脳から解放され、その機械の一部に組みこまれた機構によってなされるようになったのである。このように人間の筋肉労働、反復的な手の運動の熟練に代行することが可能となったのであるから、これは従来機械の概念からは明らかに一歩ぬけ出しているといつてよからう。とすればここにはじめて道具から機械への進化に比肩される生産技術の変化が始まっているということになるだろう。」「現在のオートメーションはまだごく初期の段階にあるにすぎないにもかかわらず、はやくも工場労働者のチームにとってかわり、個々の機械の作業を整合し、連結して工場全体を一つの生産体に変えようとしている。…そしてオートメーションは原則として機械の番人や機械的な反復作業を行う事務労働を排除するのであるから、歴史的には、機械が職工を近代的な工場労働者にかえ、マニファクチャを駆逐して、工場制工業を樹立した変革に通ずるものを含んで進行していることである。」<sup>11)12)</sup>

ここでは既に事務労働が機械的な反復作業になってしまっている点が強調されている。なぜなら、このことの成立している環境がなければ、マイクロコンピュータが事務労働にとってかわることはできないからである。要するに、人間の労働が生産物を生産するために必要な物的媒介手段が道具である。事務労働では筆記用具、紙、そろばんが原則的な形であったが、次の段階で機械が入り、さらにセンサーと判断機能をもつ物的媒介物が入ってきたのである。

機械が新しく担っていく機能は、労働者の労働の内容からの解放ではあるが、労働者全部を機械に変えることはできない。なぜなら資本家の目的である利潤

10) コンピュータ研究会編、『コンピュータ労働者とコンピュータ労働白書』、技術と人間、1984年12月。

11) 中村静治著『技術の経済学』三一書房、106、110ページ参照。

12) 石沢篤郎著『コンピュータ科学と社会科学』大月書店1978年2月、この書物と同じ箇所が引用されている。



の源泉である剰余価値が創造されなくなるからである。

また『資本論』では不生産的労働であると規定された商品取引資本ではあるが、厳密には物質的生産物を生み出さないわけではなく、書類という生産物を生み出しているわけである。例えば、マイクロフィルム、磁気テープ等はこの書類が変形したものと考えられる。

さらに注目すべきは必要不可欠な書類の数が大幅に減ることである。従来、帳簿から帳簿へと転記して計算されてきた機能の役割をコンピュータが処理して途中の段階の書類を作らなくて済むようになったのである。

そこでの労働者は、情報運搬労働<sup>13)</sup>とでもいうべきものである。ここで注意しておかなければならないのは、OA機器とは、マイクロコンピュータや大型電子計算機だけをさすのではなく、ファクシミリ、ワードプロセッサを使用している労働者も、OA機器に従事しているのであるから、この方面の研究が、ややおろそかになっているのではなかろうか。

次に述べておかなければならないのは、何が、オペレーターやキー・パンチャーを制御しているかという点である。正確に言えば、ソフトウェア体系である。つまり、ソフトウェア→ハードウェア→コンピュータの順で操作が構成されている点をみれば、すぐわかるはずなのに、意外とこのソフトウェアがコンピュータ制御の出発点であることに気づかないことが多い。

ではVDT労働についている労働者について、最近、特に多くの研究がなされてきているが、この労働者は一体どんな状態にあるのであろうか。職業病としての症状は、眼精疲労や頸肩腕障害、頭痛、足、腰のだるさ等が訴えられてきているが、これはOA機器独自の病状であろうか。機械制大工業時代の頃(1770年代から1830年代)から、資本は無制限の利潤追及のための労働強化と長時間労働を行ったが、その時には、人間の奇型的な体系や、眼病や、自律神経失調症などがあらわれた。しかしながらVDT労働の病気の特徴は、一部の

13) 後に情報投入労働という言葉が出てくるので、その言葉であらわされる職務はシステム・エンジニアをも含むように使っているのもので、それと区別するために、この言葉を考案した。

感覚器官の酷使が、体全体の疲労にまで発展していくところにあり、視神経の酷使と、長時間の姿勢拘束のために、全身の神経系統を伝わって、体の各部分に疲労が現れるという。VDT労働は、かつて人類が経験したことのない光源をみつめての労働である点は強調されねばならない。又、入力の際に書類を見る際、斜めの台座の上に乗せたりして、書類を見やすくする等、種々の対策が講ぜられるようになってきた<sup>14)</sup>。

以上の面は労働者にとって主として分業をもたらす否定的側面である。次に肯定的側面に目をうつそう。仲村政文氏は以下のように述べられている<sup>15)</sup>。

「スミスにあっては、社会的分業＝『大製造業』は、分業とは区別された交換社会＝商業社会にほかならない。だから技術的分業における協業の側面が欠落しているにもかかわらず、社会的分業においては、マルクスによっての『生産力』として規定づけられた『協働』の側面が交換を媒介して前提されているのである。」

OA下における事務労働者についても分業による協業の側面はあてはまるのである。よって、労働の社会化の側面は、全労働者により、着実に進みつつある。よって労働の社会化とその生産物の私的所有の矛盾は一層深刻化していくであろう。

## V ソフトウェア作成労働とシステム・エンジニアの労働

ここでまず、ソフトウェア作成者とシステム・エンジニアという職種を取り扱う。なぜなら、これまであげてきた労働者たちを制御しているソフトウェアと、それを現実の職場において、体系的に構成する役目を担っているシステム・エンジニアを労働という側面から考察してみて、上述してきた労働者達とい

14) OA機器に対する健康対策は、以下の二著が要領よくまとめている。

(1) 馬場快彦、神谷雅晴編著、『OA機器の健康対策』日本経営出版会、1985年6月。

(2) 細川 汀、西山勝夫、中迫 勝、田井中秀嗣共著、『VDT労働入門』労働基準調査会、1985年。

15) 仲村政文「マルクス生産力論の一源泉——A. ユアの所説について——」鹿兒島大『経済学研究』3号、1968年、69ページ。

かなる関係にあるかを探っていくのが論理の筋道であるからである。

ここでは、まずソフトウェアとシステム・エンジニアについて要領よくまとめられている青水司氏の説明を検討しつつ論理展開する<sup>16)</sup>。

「ソフトウェアは、システム・プログラムとアプリケーションプログラムから構成されるが、システム・プログラムのうちで基本的なものが、オペレーティングシステム（以下OSと略称）である。」

「さらにFORTRANなどのプログラムなどの言語で書かれたアプリケーション・プログラムは、コンパイラなどの言語処理プログラムによってコンピュータが処理できるマシン語に変換されるから、この関係のなかにおいては、このアプリケーション・プログラムは労働対象であり、言語処理プログラムが労働手段となる。……なお、プログラムの中に組み込まれたデータは当然労働手段の一部である。」「情報投入労働は、オートメーションの制御機構が機能するために必要な制御情報を設計し投入する機能をはたす。この情報投入労働を中心的に担う技術者は一般に、ソフトウェア技術者、あるいは情報処理技術者とよばれる。」

「設計と製造の総合的コンピュータ化が発達すれば、設計労働と情報投入労働の一体化が進展することになる。このことは、機械制生産に分化されてきた技術的労働と直接的労働とが、情報投入労働を媒介として再編成、再結合していくことを意味する。」

この著述よりすると、上記のソフトウェア技術者というのは、通常システム・エンジニアと呼ばれている労働者であり、ただ単に与えられた情報を投入するだけの職種が、オペレーター並びにキーパンチャーであり、我々が前に情報運搬労働者と名づけた人達である。これらの労働者は、これからの情報社会において、どのような役目を受け負っていくのであろうか。プログラマー35歳定年説がささやかれているように、プログラマーの仕事は、その作業過程で、極

16) 仲村政文・篠原陽一編著、『現代技術の政治経済学』青木書店、1987年4月、青水司著、第Ⅲ節「オートメーションの経済学」82～104ページ。

度の精神的緊張を強制される。それは、記号一つの間違ひをおかせば、全体のプログラムがだめになってしまうのである。このような完全性を求められている職業につくと、強迫神経症という職業病にとりつかれるという場合がでてくる。例えば、何度も何度も手を洗ったりしたりするので、この職業病はすぐ他人に気づかれる。これら、職業病にかかる危険性を持ちながらも、将来、労働者はどの方向へ向かって行くのであろうか。青水司氏は次のように述べている。

「将来の方向として、ハードウェアやソフトウェアのシステム自体を設け、改善していくことが主な仕事になるだろう。そのためには従来の現場実務だけの教育、訓練のほかにハードウェアやソフトウェアのシステムを設計していくための方法論や専門知識を備えた人に育てていかねばならないであろう。」

つまり、より豊富な専門性をもった知識労働者になっていくのである。これは人間が発達していく上で、積極的な面を表している。

## VI 雇用状態について

電気労連の調査や総評の調査においては、事務部門で働いていて、OA化した後に労働者の人数が減ったという回答は意外に低い。これはまだOA化が始まったばかりの段階であることも一因であるが、VDTを使って労働者一人が生み出す利潤率が、他の競争会社より高くなれば、労働者数をふやす場合もあるわけで、この回答は当然の結果である。我が国のこのような現在の状態はやがて変化し大量の失業者がでてくると多くの書物で指摘されている。なぜなら日本では無制限にOA化が進展してきたし、なんら、労働組合との協定もほとんどないからである。西欧では、すでに70年代の後半からVDT労働の安全対策がたてられてきた。例えばノルウェーの『労働者保護と労働環境に関する1977年法』、スウェーデンの『労働環境法』(1978年)、西ドイツの『職場安全法』(1973年)および『VDTを使用する作業に関する規定』(1981年)、イギ

リスの『職業における健康安全法』などである<sup>17)</sup>。さらに「カナダのワテロー大学のハリー・ジャルマーは、VDTのフライトバックトランスを遮蔽するよう勧告している。そして妊娠中の女性は遮蔽されていない機械で働いてはならない。」としている。放射線被爆に対する予防策である。これに比べて我が国ではなんら法律的な措置がとられていない。さらに、労働者派遣法が制定されてしまったので、職業安定法第44条と、労働基準法第六条にある中間搾取の禁止から、労働者の供給が禁じられていたが、これが空文化してしまった。オフィスの労働分野でも、だれが派遣労働者で、だれが正社員なのかわからなくなってしまっている。そして、プログラマーやシステム・エンジニアが下請け会社によって雇われている場合、彼らは中間搾取が激しいため親企業の支払った賃金の半分以下しか受け取れないようにしくまれている。

また在宅勤務をバラ色に描く論者に対しても墨岡氏は「在宅勤務は家庭にしながら仕事ができるので女性には好都合のようにみえるが、実際は、納期とコストの面で厳しく管理されるので、あまりメリットがない。またワープロを家庭に配置して家庭の主婦にやらせる会社もあらわれている。これは一種のコンピュータ内職ともいえるものである。」「現在の内職制度そのものが労働条件を悪くさせているのだから、このコンピュータ内職の実態は容易に想像される」<sup>18)</sup>と厳しく批判されている。これは、労働者が従来保持してきた処分自由な時間を資本家がつみ取る程度を増すものである。

また、我が国でよく指摘されるように、高齢社員がプログラマーになるための訓練が一方で行われているが高齢になればなるほど機器についていけなくなるので管理職になれば、別であるが、その他の場合解雇されることになる。

そして他方では若年労働者を優先的に雇用しているのであるが、高齢化社会が到来すれば、一体高年齢者はどのようにして生きていけばよいであろうか。我が国では、職業転換のための、国公立訓練施設もなく、まったく放置したま

17) 墨岡孝著、『O・A症候群！——ハイテク時代をしたたかに生きぬくために——』三笠書房1984年、196～200ページ。

18) 同上書、194ページ。

までである。さらに我が国では、パート・タイマーの採用が率先して行われているが、経済的には家計が苦しいが故に、働きに出るのであるから、従来、夫一人分の所得が、家族構成員の中で労働できるものの人数に割りふられたわけであり、けっしてパート・タイマーの賃金によって家庭の収入が前より多くなることはないのである。以上のような状態において、労働者はどんな意識をもつようになるかを、我が国について検討してみることにする。

あるシステム・エンジニアが一つのシステムを作るに際して、システム全体ではエンド・ユーザーが主体性をもっているため、仕事ではその内容に面白さを感じているが、最終的な命令権をもっていないので自分の発想を生かし切れず、不満をもつ。それに加えて彼が派遣労働者であれば、スペシャリティーを売り物にしたジブシーの性格をもたざるを得ないであろう。こうして、システム・エンジニアは、雇用会社への帰属意識を薄くさせていく。しかも彼等は、高学歴であり、手に技術をもっている。これは芸術家も持っているのと同じような専門家意識を持たざるをえないようにしている。そこで一般の労働者が団結しようと思った時にも、それに溶け込まるのに慣れるのに時間がかかる。

「亦、システム・エンジニアが派遣労働者として派遣されるときに、客先でシステムを開発した後に、まず幾人かが残り、導入後の保守や初期トラブルが収まるまでその会社のシステムの面倒をみる。その後は一人か二人が客先に残る。」<sup>19)</sup>

このような派遣労働者は派遣先である客先の統制に服していて、給料は派遣元から支払われる。かようにして労働者の会社への帰属意識は一層薄れていく。ここに年功序列型賃金体系と生涯勤務意識が、急速に変化し始めている。では最後に社会全体の中で、OAがどのような役割を果たしてきているのかを検討し、そこで働く人達の健康対策を検討してみることにする。

## VII OA と INS (Information Network System)

19) コンピュータ労働研究会 編、『コンピュータ技術者によるコンピュータ労働白書』、技術と人間、1984年。

INSは数百台、あるいは数千台ものマイクロコンピュータを一つの又は二・三の大型コンピュータに結び付けているシステムである。

我が国で最初にこのシステムを使用したのは民間では銀行であった。一般にはオンライン・システムと呼ばれている。そもそもINSが導入されるに至ったのは、銀行を利子生み資本と言い変えてみればよくわかる。銀行は、一方で莫大な量の預金を集め、整理し、他方で貸出し、及び投機を行う。預金の振り込み、支払いは毎日、莫大な量の伝票や、各種の帳簿、小切手、手形というような、多数の書類を取り扱っていた。閉店後、この各種の帳簿と、現金総額が、一致しているかどうかを調べるのに多大な労力を必要とした。その上、銀行資本家はその規模が大きくなると、上記の書類はますます莫大になっていった。そこで、銀行資本家はこれを機械にやらせることに決定した。亦、他力投機行動をする際には、刻々と変わっていく証券市場の動き、各種株券の値うごき等を即座に知る必要性がでてきた。

更に国際的に分散している証券取引所からデータを即座に本国の本店に送る必要もあった。そこで、これも情報をコンピュータに入力しておいて、国際的な証券市場における値動きの予想を立てることを立案した。このように、いつ、どこで、いくらかの金額が動いたのか、亦、それによって当がい銀行にどれだけの現金が保持されているかも、その日その日に分るようになった<sup>20)</sup>。

ところが前者の業務については労働強化をもたらすことになった。このシステムでは本店にある大型コンピュータが使用できる時間は指定されており、その時までには、必要な入力情報を整理しておかねばならなくなり、必死で現金と帳簿に記入している数字があっているかどうかを調べることになってしまった。また、この場合でも前述したように、誰が、どこで、どのようなミスを犯したかがわかり、労務管理がより詳細に行われるようになり、賃金は実質的には出来高給へと変化してしまった。

もう一点述べておかねばならないのは販売部門とオフィスがコンピュータで

20) 波辺峻者『現代銀行企業の労働と管理』千倉書房、1984年3月、参照。

結ばれるようになった意味である。つまりある品物が売れた時に、その包装にしまのマークがついている商品は、販売店のレジの上を通過させた時、即時に販売元へ売れたことがわかる仕組みである。俗にPOS (Point of Sales) といわれているものである。そして販売元の事務部門が、何が売れているから増産し、何が売れていないから、生産中止にするかを工場へ伝達することになる。これは、労働の社会化という点からみて、非常に重要なことである。

つまりカール・マルクスが用いた用語である、生産資本、商品資本、貨幣資本が直接に結付けられて相互調整が可能となり、現代の独占資本が最大限利潤を引き出すために市場における情報に応じて独占価格を維持するように行動しやすくなったからである。

このことは、一つの巨大な資本に雇われている労働者相互が、工場、事務部門、販売店の区別をつき破って結びつけられるに至ったことを意味する。労働者の団結も、この資本の陶冶によって、すべての部門に拡大していくであろう。また経営のトップ・マネジメントが資本家でない場合は、企業内外の別を問わず、会議も双方向通信のテレビで行われていくようになる。現在はこのテレビ会議については賛否両論があるが、やがてトップもテレビ会議によって追いつくことになるであろう。技術上、現在は電話の数千回線を必要とするが、光ファイバーなどの通信技術への適用が行われれば、現実化されるであろう。資本のテレビ会議のための費用が人間の移動の費用より安くなればの話ではあるが。

## VIII 労働者の健康対策と将来の展望

総評マイコン調査委員会が行った「VDT労働と健康調査」では作業条件と健康状態の関係は、作業時間が長くなるほど慢性疲労を訴える率が高いことが判明し、68.6%の人が作業後に疲れを感じ、「いつも疲れる」と訴えている人は19.2%にもなっている。この日本における調査では一日当たり4時間未満の労働者は74%、残りの26%はヨーロッパ諸国の法的規制を超えた長時間作業をし



ている<sup>21)</sup>。特に、このVDT労働は、仕事に熱中し出すと、機械に吸い寄せられる精神状態になり、一たん取りつかれると、思わぬほどの長時間労働をしていたことに気がつくことが多いと多数の報告がある。特に、コンピュータと対話する時間（対話というよりは、コンピュータの送り返してくる情報といった方がよいかもしれないが。）が長い労働者や特にこの傾向の強いプログラマーやCAD (Computer Aided Design) に従事している人は、他人と話すのがおっくうになってくる症状があらわれてくるという。そしてひどい場合には前述した強自神経症やうつ病になりやすく、さらに会話をしているときに、Yes か No かというような二者択一の問題提議をするようになる。明らかに、コンピュータ的思考の影響を受けたことがわかる。今から三年も前にクレイグ・ブロード博士は、人とコンピュータの関係のバランスが崩れるとき、精神的な病が生れると考えそれを「テクノストレス」<sup>22)</sup>と呼んだがコンピュータ関係の労働が、強いストレスを生み出す労働であることは多くの医師の指摘するところである。

こういう問題を解決してゆかねば、VDT労働や他のOA機器は思わぬ災害を人間に及ぼすことになる。しかしながら、このOAは、社会の成員全体を結びつける可能性をもつ機械であり、現在、既に一資本内部では現実化してきている。特に、労働組合組織が強力な産業分野では、社内のそれぞれの異なる職種における労働状態がOAのために似てきているところから団結のきざしがみられる。資本の論理で、コンピュータを作動させないで、労働者による規制を加えていくことができれば、コンピュータは、人間の奴隷労働を解消することを可能にできる機器である。マルクスの『資本論』の機械制大工業の叙述にあるように、労働者の労働の内容からの解放と相伴い、事務労働者の労働転換が

21) NHK取材班『21世紀は警告する——小さな家族の大きな崩壊・電子社会の孤独』、日本放送出版協会、1985年、150ページ。

22) クレイグ・ブロード著『テクノストレス』、池央 耿、高見浩訳、新潮社、1984年8月。

23) 工場労働者に関する労働転換の法則についてではあるが、事務労働者の現在の労働転換にも適用できるとされる論文に、中野雄策「労働転換法則について」『経済研究』一橋大、17巻4号、1966年がある。

行われてきている。それはとりも直さず、人間の全体的発達への一契機である<sup>23)</sup>。